

あらしの前の木と鳥の会話

小川未明

青空文庫

ある山やまのふもとに、大きな林おおはやしがありました。その林はやしの中なかには、いろいろな木きがたくさんしげつていましたが、一番ばんの王おうさまとも見みられたのは、古ふるくからある大きなひのききの木きでありました。また、この林はやしの中なかには、たくさんおおな鳥とりがすんでいました。しかし、なんとおおいっても、その中なかの王おうさまは、年としとつたたかでありました。多くおおの鳥とりたちは、みんな、このたかをおおそれていました。ある日ひのこと、古ふるいひのききの木きと、たかたかとが話はなしをしたのであります。

「いま、人間は、ひじょうな勢いで、いたるところで木を伐り倒している。いつ、この林の方へも押し寄せてくるかしれない。人間は、りこうかと思うと、一面は、ばかで、自分から火を出して、自分の住んでいる家も、また、せつかくりつぱに、仲間のためになつた街も、みんな焼いてしまう。そんなことは、俺たちが考えたつて、想像のつかないことだ。そうして、家が失くなつたり、街が焼けてしまうと、あわてて大急ぎで、俺たちのほうへやってくる。そんなにまで俺たちは、人間のために尽くしているのに、ありがたいとは思っていない。」と、ひのきの木は、話しかけました。

くるくるとした、黒い、鋭い目をしたたかは、これをきいてい

ましたが、

「人間にんげんというやつほど、わがままなものはない。おまえさんが、
 そう怒おこんなさるのも無理むりはない。私わたしたちだつて、これまでずいぶ
 んこらえてきたものだ。」と、たかは、おうようにいいました。
 「しかし、あなたがたは、自由じゆうに飛とんで歩あるける身体からだだから、なに
 も、人間にんげんのいうとおりにならなくてもいいのだ。人間にんげんのいな
 いところへいつてしまえば、つらいめにもあわなくてすむとい
 うものだ。」

「ひのきの木きさん、おまえさんわたしも、年としをとつて、すこし、もうろ
 くなさつたとみえる。私わたしたちの仲間なかまが、人間にんげんのために、どれほ
 ど、働はたらいて、どれほど、いじめられてきているか知しれたもんでな

い。だいいち考かんがえてみなさるがいい。人間にんげんは、馬うまや、牛うしや、犬いぬや、ねこのために、病びょういん院いんまで建ててやっているのに、私わたしたちの病びょういん院いんというようなものを、まだ建てていない。こうした大だ不公平いふこうへいは、ここに挙げあげ尽くつくされないほどある。これに對たいして、あなたがた同どう様よう、私わたしたちが、黙だまっているものですか。」と、年としとつたたかはいいました。

空そらを暗くらくするまでしげつたひのきの木きは、黙だまって、たかのいうことを聞きいていました。

「おい、兄きょうだい弟だい、もうよく話はなしがわかった。俺おれたちは、みんな人に間げんの仕し打うちに對たいして不平ふへいをもっているのだ。しかし、まだ、これを子し細さいに視し察さつしてきたものがない。だれかを、人にんげん間のたくさ

ん住んですいる街まちへやって、検しらべさせてみたいものだ。そして、よく人間にんげんが、不埒ふらちであつたら、そのときは、復讐ふくしゅうしよう……そうでないか？」と、ひのきの木きはいいました。

一一

たかは、曲まがつたくちばしを、木きの皮かわで磨みがいて、聞きいていまし
た。

「それは、いいところに気きがついたものだ。さつそく、視察しせつに、
だれか、やったらいい。おまえさんには、だれがいいか、心こころあたりは
ありませんか。」と、たかは、ひのきの木きにたずねました。

ひのきの木は、うなずきました。

「それは、やはり、人間の姿をしたものでなければ、この役目は、果たされないだろう。幸い、あの乞食の子を、にぎやかな街へやることにしよう。あの子には、俺も、おまえも、いろいろ世話をしてやったものだ。」

「私は、あの子に、他所から、くつをくわえてきてやった。また、着物をさらってきてやったことがある。」と、たかはいいました。

ひのきの木は、身動きをしながら、

「俺は、あの子に、いろいろな唄の節を教えてやったものだ。また、あの子が父親といっしよに、この木の下にいる時分は、雨や、風をしのいでやったものだ。蔭になり、ひなたになりして護

つてやったことを、あの子は、よく憶おぼえているはずだ。あの子は、俺おれの荒あらい肌はだをさすつて、小父おじさん、小父おじさんといったものだ。」

「あの子なら、いいだろう。」

「あの子なら、だいいちに、心こころから俺おれたちの味方みかたなんだ。」

こういつて、古ふるいひのきの木きと、年としとつたたかとは、話はなしをしていました。

夕方ゆうがたになると、父親ちちおやと子供こどもとは、ひのきの木きの下したに、どこから帰かえつてきました。子供こどもは、木きの枝えだで造つくつた、胡弓こきゆうを手てに持もつていました。

二人ふたりは、そこにあつた小舎こやの中なかに、身みを隠かくしました。

「父ちゃん、さびしいの。」と、子供こどもはいいました。

「ああ、さびしい。」

「父ちゃん、なにか、おもしろい話をして、聞かしておくれよ。」
と、十一、二の男の子は、父親に頼みました。

「そんなに、さびしければ、あした街へいってみろ！ 町へゆきや、おもしろいことがたんとあるぞ。独りでいって見てこい。おらあ、ここに待っている。帰ったら、見てきたことをみんな聞かしてくれ。」と、父親はいいました。

子供は、黙っていました。

このとき、頭の上のひのきの木に風が当たって、鳴っていました。その音を聞いていると、

「それがいい。それがいい。」といっているようでした。

「いってみようかしらん。あしたは、天気だろ^{てんき}うか？」と、子供^{こども}は
 といって、小舎^{こや}の入り口^{ぐち}から、くりのまりのような、毛^けののびた
 くびを出^だして、空^{そら}の景色^{けしき}をながめると、林^{はやし}の間^{あいだ}から、雲^{くも}切れのし
 た、青^{あお}い空^{そら}の色^{いろ}が、すがすがしく見^みられたのです。そして、たか
 の空^{そら}を舞^まつて鳴^なく声^{こえ}が聞^きこえました。

「いってみろ！ いってみろ！」
 たかは、こ^{さけ}う叫^{さけ}んでいました。

三

乞食^{こじき}の子^こは、胡弓^{こきゆう}を持^もつて、街^{まち}へやつてきました。父^{ちち}親^{おや}は、

むらある
村を歩いて、子供は、一人で街へきたのであります。

いい天気でありました。ある橋のところへくると、馬が重い荷を車につけて、引いてきかかりました。そして、そこまでくると、もう歩けなそうに、止まってしまいました。

馬引きは、綱で、ピシリ、ピシリと馬のしりをたたきつけました。馬は、苦痛にたえかねて跳ね上がりました。

これを、見ている人たちは、みんなびつくりしました。

「ちと、荷が、重すぎるのだ。」といった人もあります。

「かわいそうに。」と、馬に、同情した人もあります。

乞食の子供は、どうなることかと思つて、しばらく立つて見ていました。そのうちに、とうとう馬は、橋を渡つて、重い荷車

を引いていってしまいました。このとき、先刻、馬を「かわい
そうに。」といった人が、そばの男に向かつていったのです。

「人間は、ああして、馬や、牛をずいぶん思いきつた使い方を
しているが、幸いに馬や、牛がものをいえないからいいようなも
の、もし馬や、牛が、ものがいえたら、きつとそんな使い方は
できないだろう。けつして、黙つてはいないからね。ものがいえ
ないで幸いだ。」といいました。すると、相手の男は、それに、
答えて、

「たとえ、ものがいえなくても、馬や、牛や、また、ねこや、犬
が、笑つたり、泣いたりしたら、どうだろうね。」といいました。
「どんなに、気味の悪いことか。」と、二人は、こういつて笑い

ました。

子供は、この話を帰つたら、父や、山の木や、鳥に、話してや

ろうと思ひました。

子供は、街を歩いていきますと、鳥屋がありました。大きな台の

上で、男が、三人も並んで、ぴかぴか光る 庖丁で鶏の肉を裂

き、骨をたたき折っていました。真つ赤な血が、台の上に流れて

いました。その台の下には、かごの中で他の鶏が餌を食べて遊ん

でいました。

鳥屋の前に、二人の学生が立つて、ちよつとその有り様を見

てゆきすぎました。子供は、「なんとというむごたらしいことだろ

う。」と、思ひました。そして、自分も、学生の後ろについて、

ゆきかかりますと、がくせい 学生が、はなし 話をしていました。

「にわとり 鶏というやつは、ばかなもんだね。なかま 仲間がころ 殺されている下で、

し 知らぬ顔をして、え 餌をた 食べているんだもの。」といいました。す

ると一人は、ひとり それを打ち消すようにして、

「にんげん 人間だって同じじやないか、まいにち 毎日のように、わか 若いもの、と 年

しよ 寄りの区別なく死んで墓へゆくのに、じぶん 自分だけは、いつまでも生

きていると思つて、おも 欲深くしているのだ。」といいました。

こども 子供は、これを聞いて、なるほどと思ひました。

四

子供は、いちばん、街の中のにぎやかなところにきかかりました。

彼は、小さな手に持っている胡弓を弾いて、風から習った、悲しげな唄をうたいはじめました。すると、通る人々は、みんな不思議な顔つきをして、子供を見送りました。

そこには、きれいなカフェーがありました。多くの若い女が、顔に、真っ白に白粉を塗って、唇には、真っ赤に、紅をつけていました。そこで、やはり、その女たちも、いい声で、唄をうたっていました。子供が、風から習った、悲しい唄をうたってきたかかりますと、みんなが黙ってしまいました。

子供は、カフェーをのぞきました。ここなら唄をうたったら、

お錢あしをくれるであろうと思おもったからです。円まるいテーブルが幾いくつもおいてありました。その一つのテーブルに、男おとこが、酒さけに酔よつていい気き持ちでいました。対むかい合あつて腰こしをかけている、白おしろい粉こなを塗ぬつた女おんなも、すこしは酔よつていました。テーブルの上うへには、ビールのびんが、港みなとの船ふねのほぼしらのように並ならんでいます。男おとこは、ガブ、ガブ、みんなそれを飲のんだものと思おもわれました。

女おんなの声こえで、なにかいったようですが、それは子供こどもの耳みみに、よく入はいりませんでした。それよりも、子供こどもは、二人ふたりが、酒さけを飲のんでい
る、すぐそばに、かやの若木わかぎが、鉢はちに植うわつて、しかもその根ねが、
真まつ白しろに乾かわいているのを見みました。

ビールを、ガブ、ガブ、飲のむかわりに、一ぱい杯みずの水みずを、かやの根ね

もとにやればいいのにと、子供は、思つたのです。

「この木に、水をやらんと枯れてしまふよ。」と、子供はいいました。

すると、酒に酔っている男は、怒りました。

「なに、いらんことをいうのだ。さつさといつてしまえ！」といつて、小さなコップに残っていた、ウイスキーを子供の顔に、かけました。子供は、目から、火が出たかと思ひました。

子供は、その日の暮れ方、涙ぐんだ目つきをして、ふもとの林の中へ帰ってきました。小舎の中には、父親が待つていました。

子供は、この日、街で見てきたいつさいを父親に向かつて話しました。

ふる おお
古い大きなひのきの木は身震いをしました。

「いま、子供のいったことを聞いたか。」と、年とつた大たかに向かつていいました。

「人間は、すこしい気になりすぎている！ ちつと怖ろしいめにあわせてやれ。」と、たかは、怒りに燃えました。

「俺たちは、今夜、あらしを呼んで、街を襲撃しよう。」と、ひのきの木は、どなりました。

「私たちの力で、ひとたまりもなく、人間の街をもみくだいてやろう。」と、たかは叫びました。

たかは、黒雲に、伝令すべく、夕闇の空に翔け上りました。古いひのきは雨と風を呼ぶためにあらゆる大きな枝、小さな

枝^{えだ}を、

落日^{らくじつ}後の^ご

空^{そら}に

ざわつきたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 ㊦」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

※表題は底本では、「あらしの前《まえ》の木《き》と鳥《とり》の会話《かいわ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：富田倫生

2012年1月21日作成

2012年9月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

あらしの前の木と鳥の会話

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>